

【資料紹介】

愛知大学創設期職員座談会記録

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 佃 隆一郎

これは、愛知大学 50 年史編纂事業の一環として 1994 年 11 月に、同大学に創設期から在職していた男女各職員を招いて開催された「創設期の愛大を語る」座談会の記録である。東亜同文書院大学と愛知大学との関係については、同文書院（および外地）出身の教員に関する発言が見られるが、話題の中心になっているのは、創設当初の愛知大学の組織や施設用途であって、いずれにしても当時の実情を示す貴重な証言が集まっている。

もと原稿は座談会開催後ほどない 1995、6 年頃、（本文末尾にあるように）録音したカセットテープから業者に起こしていただいたうえで、各参加者・職員による添削が加えられたもの（東亜同文書院大学記念センターの大学史資料室に保管。データの所在は不明）である。2014 年に改めて私が自主的に、表記修正や注記追加、項目設定などの編集を個人の責任でしながら、データに入力した。文中のカッコは今回の私による注記を示す。

〔テープ起こし原稿〕

愛知大学職員に聞く

日時 1994（平成 6）年 11 月 4 日

場所 豊橋校舎記念会館第一応接室

参加者 吉田玉子、近藤正一、丸山弘夫、大塚洋子、林徳太郎

聞き手 田崎哲郎、山下輝夫、夏目近尉、植松正子

山下 史料編纂の参考資料にさせていただき、こういふ企画を持たせていただいたわけです。最初に 50 年史の編纂委員長、田崎先生からご挨拶を。

田崎 田崎でございます。50 周年を記念しての責任者をいろいろやっているわけです

が、OB の職員の方々については、早くやらなくてはということをお話しておったのですが、いろいろと遅くなりましたけども、本日機会を持てましたことを嬉しく思っております。具体的な進行は山下さんのほうからお願いすることになりますが、ま、今

日はどちらかというと早い時期のお話などが中心になるかと思いますが、ご自由に、くつろいだ調子でお話いただければ幸いです。よろしく願いいたします。

(1)

山下 今日の座談会は、楽な気持ちでご参加をいただきたいと思いますが、ポイントとしては、創立の頃から昭和30(1955)年くらいまでのことを中心にして、ま、その頃というのは大学ができて間もない頃ですし、非常に大学の財政・暮らし向きも貧しい頃だった。しかし愛知大学は、今ふうにいいますと、教職員・学生によって手作りの大学ということで、何もないんだけど心を通い合いのある、いい雰囲気のキャンパスじゃなかったかなあ、という具合に推察をいたすわけですが、そういった印象に残ったこと、それからご出席の方々が、創設の頃の話としてお聞き及びのことなどを含めて、ざっくばらんにお話をいただければ、と思います。

時間としては2時半ぐらいまで、1時間半の予定で進めさせていただきたいと思います。で、最初に、それぞれの方から、大学で働いていらして一番印象に残ってること、こういうことが思い出としてぜひお話ししたいということがありましたら、そこから、時期をあまりこだわらずにお話いただければ。例えば、事務の仲間のことで、先生の印象でも結構ですし、それから仕事を通じての一番印象に残ったことなど、うかがえればありがたい。で、最初にお名前と、それからお勤めになられた時期、何年に、ま、昭和23(1948)年からお勤めの方が多いと思いますが、そのことも触れて、お話をいただきたいと思います。

早速ですが、吉田さんからおうかがいできませんでしょうか。

吉田 昭和22年ですね。22年の11月1日付で。

山下 ああ、そうですか。

吉田 はあ。で、ちょうど来ましたらすぐ、創立1周年の時期でしたから、なんか図書館の大掃除ばかりさせられましてね。館長はあの時は、私の入りました時は神谷(龍男)先生だと思ったんですけど。だから私が入れていただいたのはその年の、5月ぐらいに話があったんですけども、ちょっと一人入れなきゃならんから。大内(武次)先生の奥さんのことらしいですけどね、初代(図書館長)に大内先生というお方がいらして、亡くなられましたから、その奥様が、やっぱりちょっとお手伝いにお入りになるので、図書館じゃないんですけどね、そのために。

山下 生物の大内(義郎)先生(東亜同文書院長を務めた大内暢三氏の実子、ファッション評論家の大内順子氏の実父)の奥さん?

吉田 いや、創立当初の。(設立)準備期間にいらして、亡くなられたんです、急に。

丸山 ああ、創立当時からいらした、京城帝国大学関係の先生ですね。

吉田 あの時分、お互いみんな経済的に困っておいりましたから、その奥様をある時期入れなきゃならんからというので、半年ほど待ちまして、それで11月1日から入ることになりまして、だから図書館長が替わっておいまして、小幡(清金)先生だったんです。で、小幡先生はとてもきれいな方ですから、とにかく図書館のお掃除を、3日か4日ぐらいさせられまして。図書館だけは窓にガラスが入っておいまして、ほかの教室は入ってなかった。

山下 その時の図書館というのは、今のどこですか。

吉田 今の（総合）郷土研究所のところで、今あのままそっくり残ってると思います。それで奥のほうで、何に使ってたんだらう、こっちのほうで閲覧室で、入口が…あれから向こうが書庫だったんです。で、初め書庫で仕事をしてましたけども、書庫というところは紙で私たちの体温をとるから、とてもいけないからって、廊下が広がったもんですから、ガラスの戸で一部屋こしらえて下さって、そこで私たち、事務のほうの仕事をしてまして。で、事務長の田中（清）さんは、こっちに一つ小さいお部屋がありましたからそこへ。それからその向かい側が、宿直に。あの時分、図書館は毎晩泊まりがありましたから、男のアルバイトの学生の方たちが泊まったり。田中さんは泊まりませんが、ほかの人が泊まっております、そういう状態でした。

本はたくさんありましたけど、まだ整理ができてなくて。で、その時は女の方が藤田さんという人。今は柴田和子さんといいますけど、あともう一人、ちょっと名前忘れちゃったけど、私とで3人だったんです。それで、とにかく毎日お掃除から始まりまして、終わりは4時半でしたかしら。そこで交代ですけど、晩は8時まで、宿直の人が引き受けてやっておりましたから。

山下 その頃は創立の時ですから、今でいう霞山文庫（ですね）。

吉田 それはねえ…あそこの建築関係の方が入ってましたところ、一番東のほうを持ってたので、それから、買ったものとかいろんなものは、あそこの書庫に、とにかく手をつけられないほどたくさんありました。

山下 ありましたですか。

吉田 はあ。それは一応向こう（東京の霞山会館）から来たままですから、古いラベルで番号がついておりましたけど、それを全部変えなきゃなりませんもんですから。先生方みなさんご熱心で、こちらは追いかけられるぐらいでございましたけど、人数も足りませんし、私も半分素人でしたから、なかなか、しばらくは大変だったんですけど。それで、新聞はいろいろなを取っております、その整理もできておりませんしねえ。男の田中さん（だけ）の時は無理だったと思いますから、女の私たちが全部そういうものを整理して、一応いろいろなものをとにかくまとめることだけはいたしましたけど。

山下 その昭和22年頃というのは、出版事情も非常に悪いですから、本を買うにもなかなか大変で、学生も本を持ってない時代ですよ。そういう時にはやっぱり、本を集めるのも大変だったろうと。

吉田 大変だったと思いますねえ。それでも一応本屋さん、^{ほうせんどう}豊川堂が主ですけど、入りましたけどもね。先生方がご自分で買ってらして、こちらでお払いするような。とにかくまだ事務的にも系統が立っておりませんですから、何が何をやるということがはっきりできておりませんで、いろんなものをみんなで手伝ったという形で。閲覧のほうもやりましたし、書庫のほうの整理もやったり、ちょっと秩序ができておりませんでしたけど。でもだんだんいろいろ整理ができてきてまして、人数も、男の方が少し増えたりしました。それで昭和28（1953）年ぐらいに火事がありましたでしょう、ご存知ない？ あの向かい側。その時私ちょうど日曜日で、晩の日直だったんですよ。鈴木・清水さんが泊まりで、引き継いでうちへ帰りましたら、愛大が火事だってお隣

りから言ってきたものですから、それですぐ走って走って。

山下 どこが燃えたんですか。

吉田 今の国研（研究所棟）の東側。今のちょうど研究館（当時の。2014年取壊し）と図書館の間ぐらいに、古い建物がありましたね。

丸山 農研（農業研究会）があってね、三好（四郎）先生の研究室が火元でね、確か電熱器の丸いニクロム線、あれの付けっぱなしじゃなかったかという、当時の記憶があります。

林 火の手があがったのを、火の見ヤグラで見つけて。

吉田 いやその前にね、^{ごうだ}合田（昭三郎）先生が見つけたみたいで、入ってみえて…。あの、人の話ですが、だから合田先生が警察でそりゃひどく調べられて、「絶対にこれから火事のことは言わない」で言ってもらったそうですけど。ま、上から見えたんですけど。それでちょうどその後、半分を図書館がまた次に使ったわけですけどね。

丸山 その後図書館がねえ、東側のほうに書庫を作ったものですから。

山下 鉄筋の？

吉田 その前のね。

山下 向かい側ですか？

丸山 鳥がたくさんいる森の。

山下 サンクチュアリ。

吉田 ちょうど今の図書館と（前記の）研究館の間ぐらいのところ。

山下 そうですね。私たち昭和29年頃は、その図書館だったですからね。

吉田 ああ、そうですか。

丸山 南側から入ってね。

吉田 軍隊のあとの建物を使ったわけですからね。それが確か（昭和）28年か9年の

12月の第一日曜です。それ、覚えておりません。

山下 それは、移ったのが？

吉田 火事が。29年だと思うんですけどね。まだ私が今のうちに移らなくてこっちのところにいましたから。

山下 建物が半分ぐらい？

吉田 半分ぐらい焼けましたね。

丸山 いわば、農研にしてる部分のところが半分ぐらい焼けてしまって…図書館、前のほうに南向きに図書館の玄関を作って、昔の三番教室という、確か教室をプラスした。

吉田 そうそう。閲覧室の一番北側へ書庫をあれたんですね。

山下 今お話に出た、図書館の事務長をやった田中（清）さんは、満鉄（南満洲鉄道）から来られた？

吉田 そうらしいですね。あまりお話なさる方じゃなかったものですから。

林 満鉄のねえ、大連図書館に僕は中学の時行ったことがあるものですが、もちろん田中さんは存じませんでした。

吉田 会計から何からみんな私たちが。ま、事務長さんですから、いちおう判だけお押しになりましたけど、ほかのことはみんなこちらがやって。それから館長が替わって板倉（軀音）先生になってから、少し秩序ができてきましたけどね。

山下 私どもは、愛大は給料も非常に少なく、財政的には苦しかったけれども、本だけは大事にしたとうかがっています。

吉田 はあ。でも、神谷（龍男）先生がいつぞやいらっしゃいましてねえ、私に、給料もらってるかっておっしゃるわけ。いただいてますって言ったら、そんなら結構だけどって言うから。あの時は何だかわかりませんでしたけど、その時はなかなか大変

だったらいいんです。会計のことは私たち、えらかった（大変だった）ことをあんまり知らないもんですから、お給料もらえばそれで結構ですからね。なんかだいぶ、大変だったらいいですけど。で神谷先生、愛大やめてらしたと思うんですよねえ、その時は。心配してちょっと、たまたま図書館にいらした時に、私にそっとお聞きになりましたけど。

山下 学生のことで印象に残ったことは？

吉田 なんか割合に、昔の学生は親しく応答しましたねえ、友達みたいな。で、だいたい来る人が決まっておりましたね。

林 その頃、さっきラベルを貼りかえたとおっしゃってましたが、愛大の（図書）分類はいつ頃からでしたか。初めから？

吉田 いや初めは、同文書院（所蔵）のですけどね、すぐにはやらなかったですよ。

林 それでアルファベットにされましたですねえ。Aが総記で、Bが哲学で、Cが自然科学…。

吉田 あくる年ぐらい。全国共通の図書館の分類表というものがちょうどできた年として、それによって田中さんがなさろうと思って、ちょっと待ってらしたんです。それでそれが決まったもんですから、それによってみんな田中さんが分類して下さったのを、私たちが、カード書いたり、ラベル貼ったりしたわけですけども。昔は全部手で書きましたカードでしたけどね。で、カードの数もだんだん増えてきたもんですから、1冊の本に対して2枚書いていたのが、3枚とか4枚になりましたから、だんだん大変になりましたけど。今の新しい図書館へ移るまでが、とにかく一番「創造の時期」で大変だったんです。私も無我夢中で過ぎましたし、みなさん、（当時）いた方も大変じゃなかったかと思えますけども。ただ、

だいぶ私も忘れておりますから、何かお聞きになってみて下さい。

山下 また、いろいろ思い出されたら、いろいろお話いただきたいと思います。

吉田 はい。

(2)

山下 近藤さんのほうから。

近藤 何から全部やっておったから、生活に追われておってゴタゴタと、昔のことすっかり忘れて。この間から思い出してみ、お役に立たなくてはと思っていたんですが、ついに今日まできたんですけどねえ。だいたい、どのようなことを申し上げたらねえ。

山下 （昭和）23（1948）年からお勤め？

近藤 23年の5月の15日。

山下 いや、すごく覚えてらっしゃるじゃないですか。

近藤 いまちょっと、丸山さんと一緒になって。2日ぐらい、私のほうが違っていてね。

山下 23年。で、それまではどちらにいらしたんですか。

近藤 それまでは、軍隊から帰ってきて、うちにいました。

山下 それで、配属は最初どちらでしたか。

近藤 最初は庶務課だったです。

山下 その頃庶務課っていうのは、課の名前を見たら、今日配られた資料で、おもしろいんだけど、昭和21年には庶務課と会計課があって、昭和25年に（夜間の）短大事務室がそれぞれできた。ま、これ図書館が抜けてますけども。庶務課っていうのはだいたい何人ぐらい、その当時いらっしゃったんですかねえ。

丸山 課長が浅野^{よしみ}（巧美）さん。伊東（純

子)という女性がいる、タイピストに森下(日出子)という人がいて、それから私と、小林(重雄)さん。私がねえ、昭和23年の5月13日にここへ来たんですよ。そして近藤さんがそのあと15日にみえた(来られた)。その時非常に印象的なのが、大学へ初めて来た時に、5月ですから、ピンク色のツツジがウワーッとなってる、それが今でも変わらない。いつも5月になると、それを思い出す。そして近藤さんの印象はねえ、さっき軍隊出身とおっしゃったから、髪は黒々、りりしい方がおいでになった。

その当時、さきほど吉田さんがちょっと失念してらっしゃった女性というのは、もう一人ね、藤田(和子)さんという人ですね。現在は柴田という姓で、山本和佐子という方(の家)の、(渥美線)小池の駅からちょっと愛大のほうへ上ったところにいらっしゃった。現在その方は岡崎のほうに嫁いでおられます。それから宿直していたという男性は、高瀬(茂)という人で、お化けが出ると言って、盛んにおかしなされていたことを記憶しています。

吉田 (東亜)同文書院からみえた。それからもう一人、そう言えばアルバイトで熊谷(名は未確認)という人が来てました。その熊谷という子は神谷先生のご親戚だとかいうことで、夜の宿直だけ。高瀬さんは昼間もずっとやっていたけど。

丸山 その人のあとに、鈴木清水さんたちがアルバイトに来てた。

吉田 そうそう。

丸山 そんなような記憶が今よみがえってきましたね。

吉田 伊藤順さんのほうが先に入りましたけどね、清水さんより。

丸山 あ、そうですね。

吉田 それで、伊藤順さんは正職員というんですか。鈴木清水さんは最初はアルバイト。それから女の方、あと、こっちへ移ってから増えたけどねえ。あそこの時はあんまり。そのままだったと思うけど。

丸山 当時の事務組織は今言ったように、庶務、会計があってもう一つ、今(教職員)組合の休憩室になっている、一番渥美線寄りのところの建物に、財団事務室があったんです。

吉田 ああ、そこに諸星(熊蔵)さんがいらした。

丸山 そこに諸星さんと木田(彌三旺一みさお一)さん、小西(哲夫)さん、もう一人牧野(直子)さんという女性、この方は確か、(豊橋)商業高校あたりの校長さんの娘さん。その方はしばらくいらっしゃったですねえ。

山下 これが本部ですね、いわば。

林 (昭和)26(1951)年のことですね、学校法人に。

丸山 財団事務室は21年からあったんですよ、その頃から。

山下 法人本部ですね。

吉田 横田忍さん(豊橋市長・愛大理事)という方がデンと構えていて。

丸山 昔は財団だったんだから、財団法人愛知大学。

林 財団事務室が。

丸山 そうそう、それになったんです。

吉田 横田忍さんがデンと構えていらっしゃって、浅野さんがその隣りに座ってらして、どっちが偉いかわからなくて。

丸山 で、牧野さんのあとに、牧野さんが退職したから、横田さんが連れてきた女性で小沢さんという方、このへんは大塚さん、ご存じですわね。

大塚 小沢さんは私よりあとなんですよ。



創設当初の愛知大学豊橋キャンパス全景

副門から講堂（現第二体育館）方面を望む（1947年頃。写真2枚をつなげたもの）

丸山 あ、あとだったですか。

大塚 ええ。横田さんもあとなんです。だから今のお話、ちょっとくつついちゃってるんで。

丸山 ちょっと小沢さんはあとなんだ。

吉田 小沢さんっていう子、図書館へアルバイトで入った女の子じゃない？

大塚 あの方はコザワさん、小沢^{てるこ}咲子さん。横田さんのところにいらした方は小沢好子さん。

吉田 簗島（市子）さんとは違うのね。

大塚 違います、はい。

山下 当時は浅野さんが庶務課長ですね。浅野さんはどちらから来られたんですか。

丸山 この方は、東亜同文書院（大学）でしょう。それで、石川県の小松出身です。

山下 当時同文書院から来られた方っていうのは、事務では、誰と誰ですか。赤松（幹弘）さんですか。

丸山 赤松さんは違う。

山下 違うんですか。

丸山 小西さんが同文書院かどこかから…。

吉田 三島（康正）さんは？

丸山 三島さんは違う。

吉田 同文書院というと上海だね。

山下 上海の同文書院の事務やってた人で、こちらへ来られたのは浅野さんだけ？

丸山 浅野さんと小西さん。

山下 小西さんと2人。

不明 大野一石さんは？

丸山 あの方はねえ、大野さんは呉羽（分校）にいただけ。

山下 呉羽の学生だったんですか？

丸山 そうそう。

林 赤松さんは、上海の、英国系の学校に（いた）。小西さんにご兄弟なんですよ、赤松さんは。それで小西さんの関係で（来た）。小西さんよりもあとだったんです。

吉田 三島さんは？

丸山 三島さんは、やっぱり浅野さんの関係で。

吉田 （東亜同文書院と）関係ないわけ。

丸山 実はこの会のご案内をいただいてから、今日山下さんにも夏目さんにもお話しただけども、当時の三島さんとか、あるいは稲垣（妙子）、現在は小西さんの奥さんになって小西妙子さん、そして小田美代さん、そういう創設当時の人たちがまだ周りに、県内にいらっしゃるから、そういう人たちを集めていただいて、こうしてお話し合うと、もうちょっといろいろなことが

出てくるんじゃないかと思うんです。

吉田 私はもう図書館だけでなくと済んじやったもんですから、本館のほうのことはあんまり知らないものですから。小田さんも稲垣さんも初めからみえましたねえ。

丸山 小田さんと稲垣さんというのは、いわゆるこの組織にいないけど、教務事務をやっていた。

吉田 そう。なかなかみんな重宝がって、何かとやってもらってらっしゃいましたよ。小田さんというのが、^{きゆうそじん ひたく}久曾神（昇、のち学長）さんの姪ごさんになるんです。

丸山 小田さんは（豊川市）^{こやう}国府に住んでらっしゃいましてねえ、結婚前は。

吉田 今は名古屋の近くみたいです。

丸山 小林（重雄、既出）さんも、お元気かなあ。ちょっと消息がわからないけど。

吉田 （大学近くの）南栄でよくご一緒になったけど、こっちがお辞儀しても向こうは知らん顔してる。今みえないです、あんまり会わないから。なんか初め頃というのはいろんな点が、お互いに仲はいいんだけど、秩序が立っていなかったからね、しばらくは。

丸山 大塚さんは何年でしたっけ。

大塚 私は、（昭和）25（1950）年の8月にアルバイトで。

吉田 「おさげ」で。

大塚 おさげで、はい。

丸山 「豊橋タイプ」で練習していらっしやって。

大塚 あ、私が入ってよろしいですか、それじゃ。私が愛知大学に第一歩を踏みましたのは、昭和25年の8月の2日だったと思います、確か。

あの頃はもう（名鉄、現豊橋鉄道）渥美線の電車の停留所が愛大の門の前にあった頃なんですねえ（この証言は記憶違いと、

のちに本人より申し出。事実、駅の新設は1968年になってから）。それで愛知大学の学生が増えて、愛大前（大学前、のち愛知大学前に改称）の駅ができましたけれども、最初の頃は、それで門を入りましたら草ぼうぼうで。ま、夏（休み）で学生もいませんし、人が全然いなかったんですね。で、場所はどこへ行ったらいいのか、誰にも尋ねようがなくて、副門を入れて左側に、キリスト教印刷でガタガタガタ、機械が動いてたもんですから、まずそこへ入って、愛知大学の事務室の場所を教えてもらって、今の事務室、本館（現記念館）のところへ入ったんですけれども、廊下に明かりが全然ありませんで、真っ暗なんですね。で、今は窓口ができてだいぶ明るくはなっておりますけれども、当時は窓口もなかったもんですから、壁で両側がふさがってるもんですから、本当に真っ暗で、全然人もわからないような程度でした。で、そこで赤松さんにお会いしまして、庶務課の場所を聞いたんです。

なぜ私が愛知大学に来ることになったかと言いますと、先ほどちょっと（話に）出ておりましたけれども、それまでは財団法人だったんですが、昭和26年から学校法人に組織変更になったんです。その時のタイプの仕事で、水谷恭子さんというタイプがいらしたんですけれども、一人ではとても仕事が多すぎて、ということで。私はまだ練習中の身で、実務には役に立たなかったんですけれども、豊橋タイプのほうからの紹介で、お手伝いに行くようにと言われて。で、ここに8月2日に参りまして、ずーっとずーっと四十年にもなっちゃったというわけなんです。で当時は、私は庶務課でしたけれども、さつきから何度も出ておりますけれども、浅野さんが課長で、小

林さんと、それから（出席者の）丸山さんがいらして、水谷さんというタイプの方と、そのところに私が入らせていただいて。庶務課の事務室の中はそういう構成でした。

丸山 それからしばらくたってから、平尾（とき子）さんが入ってきたんですね。

大塚 平尾さんは翌（1951）年の4月か5月ですねえ。

吉田 山本敦子さんはいつ？

丸山 山本敦子さんはもうちょっとあとかなあ。ちょうど赤松さんが山本さんのご実家の、借家、ま、あの時分、住宅がないもんだから、いろんな伝手で、住まいを確保したわけよね。そしてその娘さんというような関わり合いの中で、赤松さんのご紹介で入ってこられたように僕は記憶していません。あの時分は、住宅がなかったからねえ。

(3)

山下 その、昭和20年（代か）頃の学生のことをちょっといろいろかがいたいですけど。ま、事務室の中で仕事をされていたんで、あまりそういう学生との語り合いとか、そういうものは少なかったかもしれないけれども、例えば当時の学生の服装とか、印象に残るようなことをちょっと。

吉田 和服の人がおりましたよ。ハカマをはいてゲタバキの人が。殿岡（^{あきこ}晟子、本間喜一名誉学長の長女、父の手伝いで来学）さん。

丸山 当時はお友達のような感じだよなえ。

吉田 お互いがね。私たちがだけど。それから先生方とも、割合によくお話ししましたしねえ。

山下 学生数そのものが昭和23、4、5年ぐらいというと、全体で千人いってない？

吉田 そんなにいたかねえ。

丸山 それはそれは、大塚さんなんかねえ、ポチャーとしてかわいい子だから、男の学生がどんどんどんどん庶務課へ来たんだよ。

大塚 いやいや。

丸山 今でいう新聞会だか、学生書房なんていうのは今のちょうど、国際交流事務室のあたりにあって、あそこに倉形（名は未確認）さんとか、野沢（同）さんとか、このあいだ亡くなった東京の坂野（太郎）さんとか。

吉田 上の大石（岩雄）先生とね。

山下 それは大石ゼミのことでしょう。

吉田 ゼミじゃなくて、部活みたいなもの。

丸山 その前は愛大書房とか何とかいってたよ。大塚さん、そんな記憶ない？

大塚 ああ、ありましたねえ、書店。

山下 学生たちがやってた本屋さんですか。

大塚 私は何かわかりませんがねえ。

丸山 教科書を取りまとめとったんと違うかなあ。そのへん記憶が定かでないけど。

近藤 「あいち書房」じゃなかった？

大塚 あいち書房は名古屋（車道）。その前ねえ。

吉田 何だか私は本館のことは知らないけど、とにかく新聞部があったことは知ってる。私にも書いてくれて大石先生が来ましてね、書きまして、新聞に載せてくださいますよ、先生がここんところはやめたほうがいいよとかおっしゃって。

丸山 中日（当時中部日本新聞）の清水（武雄）先生というのがこの時分関係していてね。

吉田 ああ、そう。わりに早く亡くなられたねえ。

山下 少し前ですけど、読売新聞の釜井（卓

三) さんにお話をうかがったんです。釜井さんは(旧制)二期か三期ですね。その頃学生が東京に本を買いに行った、本が手に入らないんで。いろいろ専門書とかそういうものを買うのに、神田の書誌街、古本屋さんとかそういうところへ本を、買い出しに行った。そして(買ってきた)本を学内で売ったという話を聞いたそうです。

丸山 それかもしれないなあ、そういう感じ。

吉田 図書館では、先生方はどこかで買ったのを持ち込んでみえましたから。豊川堂あたり、遅い場合があるでしょう。東京へ出張した時か、そういう時に買っていたけど、そんなにたくさんはまだやっぱりなかったみたいです。山崎(知二)先生は全部、ご自分が紀伊国屋(書店)からとったのを持ち込んでみえましたけどね。山崎先生はまだお元気?

林 亡くなったそうです。

吉田 ああ、そうなんですか。いつ?

林 せんだって。

吉田 この頃? 本当?

丸山 先ほど吉田さんのほうから出ていた、昔の大内先生の奥さんがねえ、北門のほう、ちょうど科学館が昔あったところが、軍隊当時酒保(売店)として使われていた場所で、ミルクホールを開いて、ミルクを売っていた。

吉田 ちょっとね、やってらした。

(4)

山下 もう一つ、事務に関係ないんですけど、この大学のグラウンドにイモ畑があったというのは、だいたいいつ頃までですか。

大塚 (昭和)25年の8月は、もうすでに畑としては何もありませんでした。ただ土がボコボコになって、荒れた畑って形に

なっていました。

林 あそこ(の畑)はどうなんですか。今の短大の。

大塚 あれはずっといつまでも。教職員住宅が近かったものですから。

林 (旧)テニスコートのところ(現6号館所在地)ね。今短大の4号館が建ってるってところ(現梢風館所在地)。

大塚 はい。あれはずっとのちまでありました。

山下 そうすると学生が開墾して、イモを植えたりしたのは、21、22、23年ぐらいまでですか。吉田さんの時はイモ畑ありましたか、グラウンドに。

吉田 いや、私あんまり外へ出なかったもんですから。

丸山 あの時分に安形(政光)さんが、財団のほうに協力してて、鶏やヤギや、ウサギを飼ってたよねえ。

山下 個人で?

丸山 いや、大学で。

吉田 そうだねえ。そういえば。

大塚 それって場所はどこ?

丸山 場所はちょうど今の…。

吉田 講堂(現第二体育館)のほうじゃない? 東のほう。

大塚 この敷地内ですか。

丸山 そうそう。ちょうど(当時の)2号館の裏あたりかなあ、真ん中に土手があった…。

吉田 馬場みたいなのがあって。

丸山 その前に馬場があって、木野村(簡固)さんが床屋をやっていた。

吉田 ああ、そうそう。

山下 木野村さんが床屋さんをやってたの。

大塚 私はもう知らないんです。

山下 その床屋さんっていうのは大学が

やっていたんですか。

林 なんか大学の厚生課の所属だった。

丸山 うーん、今出た財団のほうとの関わり合いの中で、だからどういうふうに言ったらいいのかなあ。だけど、あの方は大学で給料を一銭も当時はもらってなかったですよ。床屋の「上がり」で…。

山下 消費組合？ごめんなさい、今その話、僕がお聞きしたいと思ったのは、消費組合というのは、来られた時にもうあったんですか。

吉田 いや、なかったと思いますよ。

山下 いつ頃できたんですか。

丸山 少なくとも、私が（昭和）23年にお世話になった時にはあったと思います。

吉田 ちょっと待って。私ねえ、裏の北側にいたでしょう。建物があつたところに、女の方がいてね、その方が組合関係のような仕事をしてらしたけど。学校のほうについていたのかどうか、全然そういうことは知りませんけど。

丸山 飯坂（名は未確認）さんとかいう方が、消費組合がなくなってから豊栄のほうへ行っちゃったなあ。豊橋駅にあつた元豊栄百貨店（現豊栄ビル）。

山下 それは、消費生活組合ってというのは、大学とは全然別の組織？

丸山 法人として、物資がないもんだから、消費組合で物をどっかから運んできた。

山下 買い出しに行ったと聞いてるんですが。

丸山 買えるのかなあ。自転車とかねえ、当時のカーキ色の国民服か、あんな物を調達してくれて、いただいた。僕には国民服をいただいて着た写真もあった。自転車もねえ、何台か来て、これは抽選なんだよね。私は当たらなかつたけど、というようなことがあつたねえ。

山下 そうすると、消費生活組合というのは、教職員のための消費生活組合であつて、学生のためのものではないという？

丸山 学生のためには、ミルクホールみたいなのを作つたんじゃないですかねえ。

山下 ミルクホールはどこに作られた？

丸山 北側のほう、大内（武次）さんの奥様がやつとられた（既述）。学生会館の東。

近藤 元の科学館。

丸山 北西の角のどこ。そしてその東側に、木造の学生会館があつて、その東側にレンガ造りの寮食堂があつたんですね。

山下 はあ。あの2階建ての建物ですか。学生会館があつて。

丸山 北門から入つたところにね。

山下 2階建ての学生会館があつて、その、大学院との間？

丸山 一番初めに、北門から入つて。だけど「天恒^{てんつね}」（店名か）の前から入つた、レンガの。

吉田 大学院より後ろ？

丸山 そうそう。

山下 そこにミルクホールがあつた。

吉田 ちょっとの間ですね。

山下 短期間。

丸山 昔の軍隊の、酒保跡を利用していた。

山下 そこは学生たちには、ミルクがただになる？

近藤 あれは学生課か、厚生課でやつとつたんじゃない？

吉田 なんか、ちょこつとやつては、やめたりね。

丸山 その点の事情は、服部（公明）さんがおればね、もうちょつとわかると思うが。

吉田 私たちとは立場が全然違うもんだから、つい知らないでいることが多いんですけど。

丸山 服部さんは学生課。

林 厚生課。

丸山 厚生課、そうそう。服部さんは、大内さんの奥さんと一緒に仕事をやっておられた。

吉田 ああ。大内先生とその奥さんは、そう長いことはいらっしやらなかったねえ。(大内氏の死後奥さんは) 東京のほうへ行きなされたけど、なんで行きなされたのかな、あれ。だんだん学校の様子が変わってきたからかねえ。

(5)

山下 その当時庶務課にいらした、今(冒頭)の吉田さんのお話の中に、図書館だけはガラスが入ってたけども、教室にはあまりガラスが入ってなかった。割れたら割れたままでしたよね、最初の頃は、と。で、そのへんの、資材を調達する際の苦労話みたいなもの、聞かせてもらうとありがたいなと思うんですがね、その当時の。

丸山 亡くなった中野(房吉)さんあたりがねえ、周りの廃材かなんか工夫なさって。

吉田 そう。中野さんはよく何かやって下さった方ですからねえ。

近藤 ガラスそのものも物資がなかったでしょう。ガラスを交換するにも…。

山下 冬なんかになると、ガラスが入ってないし、暖をとるのに非常に苦労したんじゃないかと思うんですね、その当時は。

丸山 これはちょっとこの前、名古屋であなたと雑談でお話したことあるけども、当時中野さんあたりが庭木の手入れ、枝打ちをして、それをたき木にして、今の本館の裏にある倉庫(1995年取壊しのものか)のところに、大きなお釜があって、そこでお湯をたいてくれた。

吉田 それを本館のほうでは、お昼のお弁当のお茶に使ったんじゃない？

丸山 あの時あそこに弁当を温めるようなふう、片っぽうはね。

大塚 一つやりましたね。二つお釜があって。

吉田 小使い(用務員)さんがおって。

丸山 ああ、坂田(済)さんね。

山下 あのお釜は、僕の学生時代にもありましたからね、まだ。お湯をわかして給湯してましたからね、それぞれの階に。

大塚 ええ、そうですね。あれ、いつ頃まであったかなあ。

山下 それぞれの人が汲みにくるんだね。

大塚 そうです。

丸山 それでたき木を調達して下さって、その当時冬の暖はたき木ストーブになって、たき木1把ぐらいか、割当てがあったんじゃない？

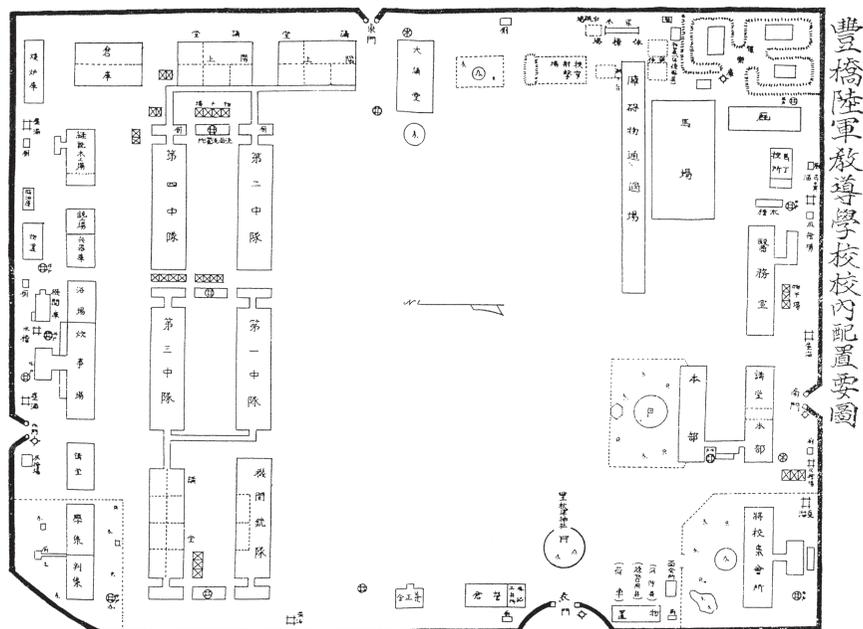
大塚 あの、それじゃ、暖房について。私が入りました年は、真冬のさ中、事務室に「手あぶり」が一個ぐらいしかなかったんです。で、課長のところに手あぶりがあって、我々のところは…そうですね、一つぐらいありましたかねえ、丸山さんや私のところに(共用のものが)一つぐらいあっただけですからねえ…。

山下 手あぶりって、なんですか？

大塚 あ、手あぶりをご存じない？このくらいのちっちゃな火鉢。大きな火鉢じゃないんです。ほんの、手をあっためるだけの。で、翌年、(昭和)26(1951)年の暮れからの暖房は、だるまストーブが入って。それで今の、丸山さんのお話につながるわけです。

吉田 図書館もその時分は石炭で、その前はなんだったかしら。

大塚 で、私は寒くてびっくりしたんです。



座談会時に参加者に配られた「豊橋陸軍教導学校校内配置要図」

これは旧陸軍第十五師団廃止後跡地が教導学校になった直後（1927～33年）のもので、旧師団司令部（創設期の愛大本館。現大学記念館）一帯の地区（この図では右側）は含まれていない（広田長平氏一故人一寄贈）

吉田 あ、初めはやっぱり火鉢でしたか。

(6)

大塚 火鉢です、はい。で、一日に配給があるのが、石炭がバケツに1杯と、たき木の、小使いさんが用意して下さる1把、それだけです。なくなったらもうそれだけでおしまい。もしも残業するような時があれば、夕方からもう1杯増配をしてもらうことができたんですけどね。で、そのうちに、石炭も物が悪かったですからねえ、あまり火力はないし、火持ちは悪いし。その次に、コークスっていうのが入ってきましたけれど、そのコークスっていうのは、とっても火のつきが悪くって、上手につけないと途中で消えちゃうんです。で、暖房については非常に苦労しました。

山下 それともう一つお聞きしたいのは、話が飛び飛びになっちゃうんですが、給料を覚えてませんか？初任給はいくらだったか。

大塚 覚えてますよ。

山下 ではお聞きしたい。それと比較の問題で、その頃こういう物がいくらだったということをお聞かせいただくとわかりやすいんですが。

丸山 僕の頃ねえ、1400円。1400円で、一回にもらうのが700円だと思う。それでねえ、革靴買えなかった。

大塚 私もそれをいつまでも覚えてます。革靴片っぽ分しか買えなかった。

山下 ああ。その時は大塚さんは？

大塚 私は丸山さんよりもだいぶあとです。2年半ぐらいあとですねえ。(昭和)25(1950)年の9月に正式採用になって、3000円がちょっと切れました。で、靴がその頃5、6千円したんです。それで片っぽしか買えないなっていうことを、いつも思っていました。

林 その頃の給料は二回に分かれてたんですか。

大塚 そうです、はい。

林 1日と15日じゃなくて。

大塚 10日と25日。

林 二回。約半分を10日。

丸山 仮払いです。

林 あ、仮払いですね。ペラペラのわら半紙が領収書で。

大塚 そうですね。

吉田 私は1200円、初めね。というのは、前の勤めてたところからのがとでもたくさんだからって、下げられて、入りました。

丸山 今でも語り草になっているというんですが。

吉田 その年の、11月からですから。その年は二へんいただいたわけですが、ボーナスが200円かしら。ちょっとえらかった(大変だった)んです。その年もだいぶインフレで、給料がちょっとでしたから、年が越せるかしらと思うぐらいでしたけどね。

山下 うどんがいくらぐらいでしたか。

大塚 20円でしたよね、学内のおうどん。

山下 学内は安いですからね。

大塚 今は建物なくなっちゃった。今の2号館の講師控室(1階西側。控室は現在別棟に移転)あたりに貯水池があって、その横にちっちゃな小屋がありまして、そこに靴屋さんとか、ちょっとした喫茶のようなどころがあって。

吉田 床屋さんもあった。

大塚 あ、そうですね。その床屋さんと靴屋さんと、それから喫茶みたいなのがあった。

吉田 最初、本館から池のほうへ出るうちに、ご不浄(トイレ)があったでしょ。向かい側に喫茶店があったでしょ。

丸山 うん。それは、向こう(の喫茶店か)がなくなってからね。

吉田 向こうがなくなってから。あ、そう。こっちのあと。

大塚 あ、それからとはだいぶあとです。

山下 今の場所はどのへんですか。

大塚 今の場所はですねえ…。

丸山 この先。この(軍隊当時の)図面には載ってない。この「教導学校南門」からこっちのほう。

大塚 2号館ですね。このあたりです。貯水池がここあって、土手がここにあるでしょう。だからここです。ここにちっちゃな小屋があって。

山下 なるほど。今の2号館の講師控室のあたりですね。で、それはどこがやってたんですか。大学がやってたんですか、その売店は。

丸山 業者。お金が大学ないもんだから。そういう業者を入れる時にはなんか礼金ぐらいもらってたんじゃない？

山下 ああ、業者がやってたんですか。

吉田 あんまりたいしたあれじゃないと思った。私はねえ。

丸山 だからそういう収入、入ってきた権利金かなんか最初もらって、そのまま…。

山下 ミルクホールはどこですか。

大塚 それは私、知りません。

吉田 商売する人が対象でしょうか。

大塚 で、水谷(恭子)さんが冬、寒いと仕事にならないので、おうどん食べに行こ

うよって言って、私連れてってもらった。その時 20 円でした、たしか。

山下 うどんが 20 円。

吉田 覚えてないんだわ、なんか。

丸山 靴屋さんってさあ、直す靴屋さん？

大塚 ええ、そう。直すだけね。

丸山 そういう靴屋さん…。

(7)

山下 ちょっと話が変わりますが、最初の頃は、寮生が非常に多かったと聞いているんですが、それは今（最終時。この座談会当時すでに学生寮は消滅）の翠嵐、思草だけじゃなくて、学部寮も？

大塚 学部寮、翠嵐寮、思草寮。

丸山 ここにある、この（陸軍教導学校時の）「機関銃隊」のところと、「第三中隊」と「第四中隊」のところじゃないかな。機関銃隊のところ学部寮になって、やがてこれが大学院になるんですけども。

山下 ああ、なるほど。

丸山 第三中隊と第四中隊のところに翠嵐寮、思草寮。どっちが思草寮か知らないけど。

山下 奥が思草寮。

丸山 第四が思草寮か。第三が翠嵐寮か。ということになるのかなあ。そして「炊事場」はいいね。「講堂」というのが先ほど

山下さんが言った、木造の学生会館になったやつだねえ。それからその北（実際は西）のほうに、「学集」「判集」（意味は後述）となっているのが、さっき話題になっていた、大内（武次）さんの奥さんがミルクホールを開いていたので、判集のところ消費組合ができていて。

山下 それはどこですか。今のお話のミルクホールは。「お化け屋敷」のほう？

丸山 北のほう、講堂がある。それがあの、学生会館と称して…。

山下 あ、これが学生会館。

丸山 うん、木造のね。それで、現在の学生会館（1999 年取壊し）ができるまでは、演劇研究、練習所だった。ごく最近、つぶすまでは。

山下 で、ここにミルクホールがあったと。

丸山 学集（学生集会所の略）のそこね、点線で囲んだところ。そして判集のところに消費組合ね。今、売店がある（これも当時すでに消滅）。

山下 ハンシュウ？

林 判任官集会所（の略）。

山下 どちらへんですか。

吉田（地図に）「将校集会所」があったでしょう、図書館（現研究所棟）の。で、その上の「本部講堂」っていうところ、「南門」がここにあるでしょう。このところにあったはずですけど。

大塚 今丸山さんのお話では、消費組合とミルクホールがって、言われましたねえ。

山下 また、丸山さんに聞きます。

吉田 右の下のほう、将校集会所が図書館の最初。

大塚 ああ、そうですか。

丸山 この一番上のほうにある「医務室」というところが、職員クラブになってたところで、ここで松山のおっかさん、こよしさんが先生方の食事を作っていた。

山下 ちょっとすみませんが、寮食堂ができたのは、いつごろですか。

丸山 寮食堂は最初からあったんじゃないの、炊事場のところに。

山下 炊事場のところ？

丸山 これは最初からある。

山下 最初から寮食堂はありましたか。

吉田 どういう人がやってたんかねえ。学

校は関係ないでしょう。

山下 学校は関係なかったですねえ。もう最初からある？

丸山 村田（名は未確認）さん、双美食堂の人がやっていたのかなあ。

山下 ここは。寮食堂は。ああ、そうですか。なるほど。

丸山 海草の入ったソウメンみたいなのが…。

山下 はあ。

吉田 外のあたりの何とかというところ。そこへ夏に、冷奴食べに連れていってもらったことがあったでしょう？

丸山 ここんとこやはり、服部さんがおらんとわからんねえ。

山下 なるほど。そうすると当時の寮としては、学部寮が機関銃隊のところで、講堂はまた別ですね。

丸山 講堂はこのままです。

山下 このままですか。それで翠嵐寮と思草寮と三つ寮があったということですね。そうすると、南のほうのところには、寮はなかったわけですね。要するに三方にだけ寮があったということですね、当時は。

丸山 第二中隊と第一中隊、このあたりは建物を払い下げて、あの時分解体して（建材を）持ってっていろいろ使ったんです。

吉田 ここんとこはなかったですよ。

山下 はあ、これはない？

丸山 商業高校（当時：旧制豊橋商業学校）で使ってたのかなあ。その時分第一中隊か第二中隊を使ってたのかなあ。

近藤 機関銃隊の中に、学寮と商業の先生と同居していた。

山下 商業は中に入ってたんですか。

近藤 先生が、この学寮にね。

丸山 ほんのわずかの間。

吉田 若江（得行）先生が入ってらした、

最初。

丸山 若江先生はねえ、「物置」のほう。例の炊事場、浴場の左側に物置があるでしょう、あそこ。

吉田 それからが、こっち側になったでしょう。

大塚 あ、逆です。

吉田 あの先生のお宅に、いっぺん用事があって行ったら、何だか妙なものが壁にいっぱい貼ってあったりねえ。

(8)

山下 あの、ちょっとごめんなさい。飛び飛びになって申し訳ないんですが、事務組織、事務局長のお名前を見ると松本（政夫）さんが、昭和27（1952）年からということになってるんですが、その前は事務局長というのはなかった。庶務課長とかそういう人たちはいたけども、学長と庶務課長あたりでいろいろやっていたということですか？

丸山 その時分の？

山下 事務組織が大きくないですから。

丸山 なんか、評議会があったと思う。

吉田 ありましたねえ。

丸山 僕が一番その中で古い記憶に残ってるのは、宿直（の仕事）があって、その時に、雨が降りでねえ、その当時タクシーなんてないから、ちょうど今名古屋（三好）校舎の施設課さいきにおける松尾さんが、旧姓齋伯和子さいきっていうんですけどねえ、北島に住んでおられた。お父さんが齋伯守（元東亜同文書院大呉羽分校長。愛大教授在職中の1949年逝去）という方で、何を担当してたのかなあ、評議員かなんかやって、今の50年史編纂事務室の部屋（現大学記念館2階西北）が会議室で、遅くなられてね、病身で、

帰るのにねえ、輪タクで豊橋駅まで手配した覚えがある。それで輪タクに乗って、片っぼうに幌がついて、もう片っぼうは人間が足で漕ぐやつ。それで北島まで帰られ、僕らが送った記憶がある。

吉田 北島に住んでらした？

丸山 北島。

吉田 (豊橋) 駅のずーっと奥(北)の、船町のほう。

丸山 あそこにねえ。やっぱり住宅難だから、服部(名は未確認)さんという方の旧家、大きな構えの家があったため。

吉田 ああ、あります。

丸山 あそこをねえ、庶務だから私ら借りに行つて、それから職員の住宅手当をするために、いろんな名前を使って市営住宅を申し込むわけ。そして他人の名前で、ある人を入れたりして、のちほどになってからちょっとモメたことがあったね。例えば島本(彦次郎)さんでも小西哲夫さんの名前で入つて、あるいは浅野(巧美)さんも名前使つてんだから、中に住んでるから、誰かが入つとったりなんかして、あとになってモメたことがあった。

吉田 それが今、八町住宅？

丸山 八町住宅はもともと愛知大学を創る時に、愛知大学の教授のために市が作ったわけですね。その後向山住宅、今大野(一石)さんや、(当時)島本さんがおられたところね、他人名義の名前で市営住宅を確保し、別の人を入れた。

吉田 ああ。それから瓦町のほうにもありますね。

丸山 瓦町は豊橋建設の河合(名は未確認)さんが持っていた土地を買つたし、それから草間(町)は吉田さんのご紹介で土地を求めて、その後私学共済組合でお金を借りて建てた住宅が(そこでの)最初だな。今

は空いてるでしょう。

吉田 だいぶ空いてますね。今、なんかお一人だけ住んでるみたいね。

丸山 昔(の造り)で、今様じゃないですね。

吉田 そう、ちょっと狭いでしょう、

丸山 またあっちこっち飛んじやつたけど、今のそのあれはね。

(9)

山下 田崎先生、何かご質問は。

田崎 いやいや。

山下 よろしいですか。

林 あの、先ほど坂田さんの話が出ましたけども、本館の裏のところの「自由受難の鐘」(現在地に移設前)が、木造の時代がありましたね。あれ、坂田さんが自分の銀時計出して…。

丸山 あれ(柱か)はねえ、当初はなかったの。松の木にぶら下げてあった、(昭和)22(1947)、3年頃。松の木がこんな…。今、松が残ってるかどうか…。竹はある。こう丸くなった。

吉田 どっかにあるような気がしますがけど。

山下 場所はどのへんになるんですか。

大塚 出てすぐのところですよ。

山下 どこを出て。

大塚 トイレの廊下ね、暗い。あそこを出てすぐ左手のところ。

丸山 こう丸い竹が、何ていうか、竹があった。

大塚 そうですね。細い。

吉田 外へ…ない竹だからね。

山下 松の木の枝にぶら下げてあった？最初は。

大塚 ええ。高一い木に。

丸山 そこで鳴らしてた。そいで何年頃で

したっけねえ、年史を見てみるとわかるけど。本館の保健室の東側で、何期の方だったか、藤田（名は未確認）さんという人が、ヒノキの柱に「自由受難」と刻んでいた。

山下 藤田さんという人は学生ですか。

丸山 学生。いろいろなところへ出ていく人。あの方が刻んでた。それをヤグラに付けて立てたのが、今いう鐘。松の木からそれに移った。

林 その鐘の目的は、始業と終業を知らせるために付けたんだと。その松の木に下げて、そういう人が柱をこしらえて自由受難を刻んで、その台に取り替えた。

丸山 そうそう。だから自由受難のヤグラは、始業の合図の鐘を吊るすために出発したわけだね。

近藤 ええ。鐘がもともとのスタートでね。

山下 すると自由受難の鐘っていうのは、丸山さんが見た時はもう、藤田さんという学生が刻んでいたわけですね。それは何年頃の話ですかねえ。

丸山 あの人の卒業年次を見てみるといいと思うが、卒業記念に置いていかれたんだからね、そのへんのクラスの人たちが。

山下 刻んだということは書いてあるけど、いつなのかが…。

丸山 卒業の記念に準備してたんだから、その年度だと思いますよ。

山下 最初墨書して、墨で書いてあったんだと。

丸山 いやいや、刻んでた。

山下 もう刻んでた？ 最初から。ああ、そう。

丸山 刻んで、墨汁でこうあれした。

山下 なるほど。

大塚 私はあんまりはつきり覚えてないんですけどねえ、だいぶ長い間、松の木にぶら下がってる記憶があるんです。ですから

(昭和) 25 (1950) 年からちょっとの間ね、しばらくは松の木でしたねえ。

山下 で、僕の時はもう柱があった。昭和29年。柱はあるんですよ。あるんだけど「自由受難」と書いてあった記憶はないんです。

大塚 あ、それは、反対から見てらしたんじゃないかしら。門のほうから入ってこられると、「自由受難」の文字は初めから入ってましたよ。

山下 門のほうからというと、どちらの門からですか。正門からか、北門からか。

大塚 副門から入って、本館へ向かって入ってくると、背中の方で見えないんじゃないかしら。

山下 副門から入ってくると見えない？ 字が。

大塚 ええ。

山下 正門から入ってくると見える？

大塚 いやいや、本館から出ていくと読める、という。

山下 そういうことだね。僕は学生だったから、副門から入っていただけだから。

大塚 本館へ向かって入ってくる時には見えない。(後日大塚氏本人より、「方角に確信がない」との断りあり)

山下 それで見えないんだ。ああ、そうですか。僕は「自由受難」って書いてなかったような気がするなあと思って。

吉田 知らなかったわけよ、その時は。

林 あそここのところ、あれでしたねえ、通路からトイレへ入るでしょう。で、トイレが、西向きで男性がやってるでしょう。で、後ろに女性が。すると…。もっとも、大のほうは(仕切りが)ありましたがね。具合悪かったですね、あれ。

大塚 ほんとにそうですよね、出られませんでしたね、人の気配がすると。

吉田 今でもありますか？ お手洗い。

林 それの向きを変えて。

丸山 そのまま使ってる。もちろん中をきれいにしてね。(1995年取壊しのものか)

吉田 ああ。

林 あんまり構わない学校でしたね。

(10)

丸山 東邦の学校(名古屋市東区赤萩町の高校。後述するように現在は名東区に移転)を使ったのはいつ頃?

林 (昭和)24(1949)年から。26年の5月に車道へ移った。

丸山 それである時、東邦高校から車道に移った時に、林さんと梶川(祐二)さんと黒川(茂)さんも入ったんだっかねえ。

林 梶川さんと黒川さんは(昭和)30(1955)年就職。

丸山 林さんは?

林 僕は25(1950)年の7月でした。豊橋のほうのお話がずいぶん出てるものですから、(主に名古屋で勤務した)僕はそういう意味で毛色が違うと思うんですけど、昭和21年の11月にこの大学ができるって、新聞で見たんです。見たんですけども、受験料さえなかった。自分が生きることですから、とにかく復員してきてから、勉強したいという希望だったのでですけども、そういうことで断念したんですが、たまたま昭和24年の8月に、名古屋に愛大が高等科をこしらえた。

山下 高等科?

林 別科の一つですね。それを名古屋にこしらえるという話を新聞で見たんです。ちょうどいい機会だと思って、それで今の東邦高校に願書を出しに行ったら、浅野さんが窓口におられて、願書の受付をしていました。それが9月。

山下 それは、高等科じゃなくて、別科ですか。

林 別科の一つなんです。

山下 それを高等科と言った。

丸山 旧制中学だから、大学に入学するまでの1年、2年のつながが必要でしょう。そのためのものを創ったんですね。

林 その当時はもう、昭和23(1948)年から豊橋にも別科、高等科がありましたから、それが名古屋に進出して、24年から開設をするということで、聞いたんですけど。それまでそういう機会はなかったけれども、チャンスがあれば行きたいということで、それからスタートしたわけです。それから、(昭和)25年から短大(現在の女子短大とは別の夜間部。以下同)ができてますけど、続く26年の5月に、それまで東邦高校のあった、借用のほうの校舎をですね、今の往還町、車道に移した。あそこのキャンパスの前身校は中京女子短大でして、いま中京女子大学(さらに現在は共学化して至学館大学)になってますね。

山下 女子短大。中京短期大学。

林 その頃は、中京女子短大というのしかなかった。

山下 中京短期大学と言ってました、昔は。

林 そうですか。で、そこの往還町のキャンパスは内木(名は未確認)さんですか、あの人の持ち物だということだったんですけど、大学は100万で買ったんですかね。で、そこを買収して、契約を決めた時に、そこへ大学が移ってきた。ですから車道、往還町は昭和26(1951)年の5月からスタートしてるんですね。

東邦高等学校の場所というのは、今ちょうど大きなビルが建ってますけど、(JR中央線)千種の駅のそばの、愛知会館がありますね(現在は存在せず)、それからその



往還町に移った直後の名古屋（車道）校舎

文中の林徳太郎氏が卒業した時の公式記念アルバムでの写真（1952年）。
ちなみに赤萩時代の校舎については、写真の現物は未発見である

向かい側の、住友生命ビルですか、完全にその二つのビルが入るぐらいの広さで、大正時代からずっとやっておった、古い学校。ちょうど道路が計画されて、当然東邦高校は、これ幸いと（土地を）道路に売却して、市から替え地を斡旋してもらって、そこへ移っていったということで、一銭も出していない。大変幸運だったですね、東邦高校は。ですから完全に、今のビルが二つ入る広さ、しかも道路が入った。ここは小岩井（浄）先生の関係で、下出（東邦学園理事の義雄カ）さんとの話を通じて…。そこに校舎と図書館があった。いろいろとありましたけど、その後だんだんよくなりました。林 短大でちょうど春でした。一條（雄司）先生がおられて、「先生、僕を大学で使ってもらえませんか」と（聞いたら）、「それではいらっしゃい」と。で、それが臨時囑託の始まりなんですけど、（昭和）27（1952）

年からは正式な職員になりました。

それ以来四十年、活動していろいろ大変なことばかりで、申し上げたいことがたくさんありますけれど。ま、初めの頃は名古屋におりましたので、昭和27年に職員になってからは、その当時からもうそうなんですけども、とにかく名古屋のほうの仕事は豊橋に来て、連絡が取れなければ仕事ができないという、二つあったことで、非常に難しい。したがって、私も豊橋に来る機会が多くあったんですが、その頃ちょうど私、バレーをやっていたもんですから、吉田さんが「あなた、豊橋へいらっしゃい」と言って、そんなことでお招きを受けたことがありましたけれど。

私がたいへん感銘したのは、この大学に、ま、高等科でもそうなんですけど、大学に入学しようとした決意というのは、その当時の教授スタッフを見ますとねえ、たいへ

(11)

ん立派な方、僕らでさえもわかるような、その当時の著名な学者がたくさんおられたもんですから、ぜひこの大学へ入って勉強したいということだったんです。その頃の伝統か、雰囲気というんですか、あの頃の先生方というのは素晴らしい方ばかり揃っておられたもんですから、僕らもちょうど、学問をしたいというか、向学心にたいへん満ちあふれて、そういう大学へ入れたということが、本当に一生の感激だったですね。それからお仕事するようになりましたけど、そういう大学でも、管理・経営というんですか、企業としての形態のマネージについては、大学はせっかくそういう優秀なスタッフを整えておいても、将来どうなんかなあというようなこと、これは若干職場の経験がある私がこの大学において、将来のことも考えながら（思いました）。ですからもう、初めから事務オンリーでいきたいということでやってまいりました。しかし、その効果は、力足らずでして。当初の感激というところから、この大学に就職しました。

それから皆さん方とお付き合いさせていただきまして、まあ一つ言っておきたいことは、この大学の中における位置づけというのか、やっぱり名古屋というキャンパスは非常になんかこう、豊橋の本部から離れたところで、意思疎通を欠くような状況があつて、やっぱり一つの経営体として、まとめにくいことが多々ある。それを何とか解決したい、解決してもらえたらということでもありますけども、（このことを）将来皆さんにお願いしたいと。

ついでのことから余分なことを言いましたけども、私は当初は名古屋が多かったもんですから、豊橋の創設期については、若干稀薄な部分があります。

山下 あの、西願寺（守）さんというのは最初から名古屋の事務部長ですかねえ。

林 あの方ねえ、昭和29（1954）年の4月からね。

山下 その前はどなたが。

林 一條先生です。

山下 が直接やっておられた。

林 ええ、一條さんがやっておられたですね。

山下 はあ、一條先生が名古屋校舎のほうの…。

林 短期大学事務局長。

山下 ああ、短期大学事務局長をやつてらした。

林 ええ、そういうことです。その頃お家は稲沢でした。病気になられて入院されたこともあります。名古屋国立病院がちょうどお城の中にあつて、そこで薬をもらつて、一條先生のお家に届けたことがありました。あ、ごめんなさい。そのあとが杉本先生です。杉本出雲さん。

山下 いつ頃から替わられました？

林 替わつたのは（昭和）27（1952）年の途中からですねえ。で、一條先生はもともとは講師で迎えられたんで、事務局長をやるつもりはないと、27年に替わられたですね。それから法経学部です。29年に西願寺さんが、四国の高等学校に勤めておられ（てから来）ました。

山下 ちょっとごめんなさい。年表を見ますと、1950年、昭和25年に、法経科二部の名古屋校舎は、東区赤荻町の東邦高校を借用して開校と書いてありますね。で、林さんのおっしゃった高等科というのが、この前ですね。

林 ええ、（昭和）24（1949）年の9月に

開設しています。

山下 24年の9月に、高等科があったわけですね。

林 その当時豊橋にもありました、高等科は。

山下 はあ。高等科というのは耳慣れないもんだから。

林 高等科に150人ぐらいと、法経講座というのがありましたね。これが200人ぐらい。

山下 あ、これは講座ですね、公開講座ですね。

林 豊橋のほうでは、別科にありましたね。

山下 あ、法経講座っていうのがあったんですか。

林 ええ、(合わせて)350人ぐらいの人数で、この350人ぐらいの中に、県の部長クラスでも多数いました。名古屋の市議会議長の西脇(名は未確認)さん、あの人もこの高等科出身だったですね。

山下 それで、その翌年にこれが、法経科の二部になるんですね。

林 そうですね。二部になるっていうか…。

丸山 短大が昭和25年の時にね。

林 そこへ、選抜試験を受けて入る。

山下 ちょっと待って下さいね。短期大学部が名古屋に置かれたんで、夜間の四年制はもっと先っていうことですか。

林 先ですね。

山下 あ、先だ。(昭和)31(1956)年だ、わかりました。

林 それで、その時にですね、あそのキャンパスを空かせておくのがもったいないからといって、28年頃だと思うんですが、「商経学部」というのを、名古屋校舎の狭いキャンパスに開設したいというので、申請の用意をされたことがあるんです。急にだったんですけど。で、商経学部を出す予定をして

おられたけど、キャンパスが狭いっていうことで、申請が取り下げられたという。で、29年に夜間四年制ですね。

山下 29年に夜間四年制ができたんですか。

林 これも、文部省への正規の手続きはやらなかった。そういう学生を募集してですね、昼夜開講ということで。建前は昼夜開講、29年からそういう形になった。31年に夜間の法経学部を、(その前の)30年には、やはり昼夜開講の四年制を開設し、1学年から募集しました。名古屋はかなり変遷があったですね。それからついでに、豊橋のほうには23(1948)年の4月から別科ができてる。で、24年に開講された。

山下 予科開設は22年ですから。

林 別科。別科の人たちは、25年に短大ができた時に吸収されています。

山下 予科と別科は違うんですか。

丸山 予科は旧制でしょう。

林 やっぱ別科も旧制なんですけど。簡易な程度で、なんか大学で手続きさえとれば開設できるのが、当時の状況でした。

吉田 予科は、私が来た時にできたような…親戚が入ったから。

林 名城(大学)にも別科がありました。名城も(当時は)専門学校ですね。なんか別科と言う制度が手続き上できるようになって、23年から開設されて。

吉田 事務関係で、別科だかに入った方がいるでしょう。

丸山 当時、高等教育なんていうのは、林さんが言っておられたように、それほど皆さん、短大ぐらい出ときゃあ、あと、兵隊にとられても将校になれるというような、そんな感覚でしたね。みんな職員の人、大学…そのうち四年制の夜間ができた頃はね、そういう時代がありましたねえ。この

中の職員はねえ。

(12)

山下 何かご質問、ございましたら。

林 今の別科、高等科なんかですね、年齢的に相当高い人が多かったですね。昔の陸軍大佐たちや、海軍兵学校卒業だとかね。比較的高年齢の人がたくさんおって、若い人、その当時の高校や、旧制中学を卒業した人はほとんどいない。要するにまあ進学したくても、しばらくの間、社会情勢で経済的に恵まれなかったものですから。

山下 適齢期の人みんな、軍にとられちゃったでしょう。だから。

林 それからそういうふうにして、溜まっとったのが、ドッといっぺんに、道ができてきたという。

吉田 今来てる人と、違うわね。

丸山 それは軍隊(にとられたこと)で、(学業を)中断された人たちが来られたんじゃないですか。優秀な方がねえ…。

吉田 多かったですねえ。今の時代の子とは違いますよねえ。見ててもねえ。

山下 うん、なるほど、なるほど。新卒ってのはいなかった？ あんまり。

丸山 ま、新卒はいないわねえ、そりゃ。中断した人たちが一年をつなぐっていうために入ったり、あるいはそういう教育に浸りたい人たちが来たりしてたから、かなり制度的には、大らかなところもあったのかなあ。通信講習所もねえ、やっぱり中等教育の一環に見てみたり、なんかこう、大らかなところがあったね。

夏目 例えば、この予備士官学校が廃校になったのち、予備士の学生が愛知大学に、という形はどうだったでしょう。

不明 そういう記憶はないんだなあ。

丸山 この、軍隊、当時(予備)士官学校の生徒があれ(転入学か)して…。

林 考えられますね。ちょうどその頃の人たちというのは昔の、旧制の青年学校の人たちがやっぱり、当時の大学入学に法令上では資格あり、でしたからね。

吉田 ちょうどいろんな学制が、変わったもんだからねえ、優秀な人が多かったねえ。図書館で見ても私、そう思いましたよ。

林 新旧学制が入りまじって、混乱がありましたし、それから、各地区に飛行学校がありましてねえ、そういうところの人たちが希望すると、高等学校(入学)の資格が発生する。昔は高等小学校を卒業したけれども、そのまま兵役があつて、それで高校を受験するとかね、そういうことが認められましたよ。

夏目 それから先ほどお話が出ておりましたけど、「自由受難の鐘」の、鐘そのもの(のレプリカか)を、今度名古屋(車道か)校舎の同窓会に寄付して下さる計画が、あるということですね。こちらとほぼ同じ。あの鐘そのものは、東亜同文書院の引揚げの時から持ってきたものかどうか。

山下 いやいや、あれは大阪の、古物を道端に並べてるもので、そこで買って来たんです。誰が買って来たんですか、あれは。

丸山 もちろん、大学当局が買ったんだね。

山下 いや、当局で、誰かが見つけて来たんでしょう。鐘は(戦争中)全部供出されたんですよ。だから、どっかの教会の鐘か何かじゃないかなという話を聞いたなあ。

(13)

山下 えー、ちょっとまあ、一応予定の時間が来ましたので、ここで終わりにして、

あとまた雑談で、テープはそのまま回して。何か補うことはありますか。いや、このことも一つ付け加えておきたい、ぜひ、という。

丸山 あのねえ、もうちょっとみんな用意していただいてねえ、さっき私が冒頭に申し上げましたようにねえ、関係の古い人も、入れてやっていただくと、いろんなとこにつながっていくと思うんですよ。

山下 一応これはね、テープを起こしていただいて、それでそれぞれの方々のところにお渡しして、それで付け加えることを付け加えていただいて、それで修正をしておく。で、それを皆さんにお配りして、それでまた座談会をやると。ほかの人たちも（お呼びして）。このへんのことだったら、このへんを付け加えたいということが出てくると思うんです。

丸山 まあ結構ですけど、やっぱり今日も厚生課（の人）が抜けてるから、全体の、筋を立ててのお話ができなかったもんだから。

山下 今度は、教務・学生課と名古屋（校舎）ですね。ぜひね。名古屋をもう少し。ま、どういう具合に使うことになるかわかりませんが、やっぱり声はずっと残しておきたいと思いますね。

林 名古屋のことに関連してまた、全体のことにともなうと思いますが、僕は昭和27（1952）年からずっと教務が長かったんですけど、その当時の教務というのは、入学試験の関係も全部やってたんですけど、昭和30年代初期は、入試をですね、4月過ぎて5月の初めぐらいまで、第四次試験、第五次試験というのをですね（、やってました）。で、その頃の入試の要項も薄っぺらいパンフレットですが、初めに刷った印刷物はちゃんと2月の初めから3月の、試

験の日にちが書いてありましたけども、表紙のところに第二次試験として貼りつけて、間に合わせて作った。窓口で受験生から、大学の試験の受験チャンスの間合わせがありましたけど、受けさせてもらえないかという者に対して、いろいろとアドバイスして。その頃の入試の状況というのは、名古屋の東邦高等学校でやった時もそうですけども、入学試験場と、面接場でやって、もう受験した者は、全部豊橋に入学ですね。昭和25年の入学生からそういうことで、試験場は豊橋と名古屋と、それからあと各地で。で、名古屋の受験生が、全体の受験者のだいたい六、七割なんですね。それで取って、豊橋校へ。

山下 何年頃の話ですか。

林（昭和）26（1951）年からです。26年といっても、それはこん日とだいたい率はあまり変わりなく、全体の受験者数の六、七割。もうその頃から、名古屋から通うというか、人口から言ってもそうなるのでしょうが、その頃の受験生は、当時でいう愛知一中（旧制時代。新制旭丘高校）がおりましたけど、30年ぐらいから、少しずつタガが外れたというか、拡張政策で、どんどん受験生が増えましたですねえ。ま、その影響もあつたんでしょうが、愛大事件との絡みで、30年代半ばぐらいから、愛大はとにかく誰でも入れるんだというような評価が出ちゃった。そのあいだに南山大学が、昔の定員をきちんと守って、しかもあそこは校舎建設を始めましたけども、ローマのカソリック神言会のほうから現物支給で、校舎の資材を全部ローマから送ってきた。で、お金がいるのは、払う給料と経常費（だけ）。南山のほうが堅実経営。うちが、財政状況からいうと昭和35、6年に、給料の遅配があつたり、ペースダウンしたりと

ということがありました。そういう苦しい状況の中ですから、とにかく学生を増やす。

ちょうどその頃、小幡（清金）先生（図書館長や理事を歴任）が、入試に関係しておられました。それが昭和40（1965）年まで続いたおかげで、功と罪があったと思うんです。功の点はやっぱり多士済々の人材が入ってきて、こん日実業界でいろいろ業績がある人たちが出てきた。一般的に社会には、愛大は誰でも入れるんだという評価があった。それにやっぱり大学の苦しい状況というのが、そういう歴史というのがあったわけですから、その歴史の中で、こん日の愛大50年を、大学らしい大学として迎えることができた。やっぱり、ちょうど30年代というのは苦難の時代だったと思うんです。学生は多かったけれども財政的には非常に苦しい。職員の給料も遅配したりとねえ。そういう苦しい中を生きてみると、ほんとに50年は、輝かしい50年と思いますねえ。

丸山 財政的なことが出たけどねえ、結局今の図書館が充実したというのは、小幡先生も予算のことにお構いなく本をどんどん買ったので、充実してきたと思うよ。それから今試験の話をしていたけど、当初はねえ、鹿児島試験場あり、熊本試験場あり、それからもちろん博多にもありましたねえ。そして松本試験場があった。

山下 当時っていうのは、だいたい何年頃のことをおっしゃってますか。

林（昭和）20年代から30年代の初め（1950年代）ぐらい。

田崎 鹿児島は45（1970）年ぐらいまであった。

林 ありましたねえ。

山下 またそういう時代来ますよ。

丸山 ま、2、3年先が心配は心配なんだ

けどねえ。これはちょっと新しいことだけど、私ずっと広報で回っておった中でねえ、本学は現役生に人気ないんですよ。文学部にはいま現在、浪人学生がどんどん希望しますけども、浪人は当然なくなり（減り）ますからねえ。2、3年先が心配ですねえ。現役に人気のある大学にならなければいかん。

山下 ま、それはまたあとにして。じゃ、どうも長時間貴重なお話をさせていただきまして、ありがとうございます。で、いちおう植松さんのほうでテープ起こしなど、ま、業者さんに頼んでやっていただきますが、それを皆さんにお配りして、何かどうしても付け加えたいことがおありになりましたら、それを見ていただいて、付け加えいただくこともまたお願いしたいと思います。今日お話の中で、教務学生関係の方々がいらっしやらないので、今度は教務学生関係の方々を中心にしてやることと、それから名古屋（車道）校舎のこともポイントに置いた形での座談会を、さらに開かせていただくかなという具合に考えております（注）。今日はまあ、貴重なお時間をご都合つけていただきましたことを、心からお礼申し上げます。

以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

田崎 じゃ、今日いろいろとヒントをいただいたので、また、何回かやらせてもらいます。

（注）ここなどで“予告“されている「続きの座談会」は、実際に翌1995年1月21日開かれた（参加者10名）。その「テープ起こし」も、やはりデータがないものの現存していて、続けて編集入力を行なった。機会があればまたそれも紹

介してみたい。

それに限らず、東亜同文書院大学記念センター（旧 50 年史編纂事務室・大学史事務室）には未発表の聞き取り・講演・座談会記録などの「オーラル・ヒストリー資料」が数多く保管されて

いる。再確認の作業を続けなければならぬまい。

末筆ながら、この座談会に参加して下さった（元）職員の皆様の中には、やはり今は鬼籍に入られた方もおられる。謹んでご冥福をお祈りいたします。